

田上 時子のエッセイ

リベラルか保守か

第48回衆院選は10月22日に投開票され、自民党の圧勝に終わった。

自民、公明両党が憲法改正の国会発議に必要な3分の2の勢力を維持する与党の大勝である。

選挙は、(何が起きるか誰にも分からない)水物と言われる。

選挙日に台風が直撃し、全国的に荒天で投票率は期日前選挙の割合が高かったにも関わらず、53.6%と戦後2番目に低い水準だった。

小選挙区の得票数を見れば、自民、公明に2653万票、野党に3309万と圧倒的な差がついている。

にも関わらず与党の大勝とは、1議席を争う小選挙区制度で、野党が分裂し一本化できなかったことが自民党に有利に働いたのだ。

野党が自公の対立候補を1人に絞れていたなら、政権交代が起こったかもしれない。

今回の選挙は自民党・公明党の与党と、希望の党・日本維新の会、共産党・立憲民主党・社民党の3勢力が争う構図になったが、そこでよく使われた言葉が「リベラル」「保守」だった。

小池百合子・東京都知事の希望の党をめぐっては、民進党のリベラル系が「排除」されるという事態になった。

リベラル(liberal)は、英語のliberty(自由)の形容詞で、free from ~、「何かに束縛されない自由がある」という意味がある。

政治においては、現代の制度や思想を尊重す

代の変化に応じて個人の自由を尊重して社会を変えていく立場をリベラル派と称する。

しかし、憲法改正論議においては、日本の保守とリベラルの立場は逆転している。保守を代表する自民党が、日本国憲法が敗戦で押し付けられたものだとして伝統を重視する自主憲法制定を主張し、安倍政権のもとでの憲法改正を目指し、戦後の基本的に人権や平和主義に価値を置くリベラル派は改憲に反対している。

ヨーロッパでは、冷戦後、個人の自由を大事にすることがリベラルの核心になり、アメリカでは少数派や女性の権利擁護、性的マイノリティの是認など自己決定権の強調という視点をもってリベラル派は活躍した。

リベラルは国家より個人を、単一性より多様性を重視する。

今選挙で、リベラル派の受け皿になったとされる立憲民主党の枝野幸男代表の選挙中の演説の「右でも左でもなく、前へ」とアピールしながら「社会は多様化している。価値観が多様化している。人々の暮らしも多様化している。その多様な声を吸い上げていく・・・」というぐだりにリベラルの考えを見た。

選挙中の街頭演説はすべてSNSで視聴したが、印象に残ったのは同党福山哲郎幹事長の次の言葉だった。「選挙で終わりではありません。スタートは明日からです。(わたし達が)国民から離れないように監視してください。説教してください。」